

---

# 妖 ~ AYAKASHI ~

川崎美鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖〜AYAKASHI〜

### 【Nコード】

N60930

### 【作者名】

川崎美鈴

### 【あらすじ】

体が弱いことを悩むツンデレ中華男児、趙李淋は、ある日突然、飛龍という妖怪に取り付かれて(?)しまう。そして彼は飛龍に自身の前世が元妖怪だったことを告げられる。

その日から彼の日常は大きく変化し、様々な出会いと戦いが運命を大きく揺るがす。

そして元殺し屋のDS変態少年カイと親しくなり、共に平凡で同性愛的な毎日をごす李淋だったが、いつのまにか自分の妖力を奪おうとする組織に狙われていた！

果たして彼は妖力を全て取り戻し、自分の命を保つことができるのか！？

## 説明

### 説明

はじめましてこんにちは。

作者の川崎美鈴です。

では、この物語の注意書き。

「妖」AYAKASHI「というタイトルにも関わらず、エロばかりです。少し詐欺的小説です。

R15です。

S・Xのところはやたらと文章長いですが気にせず。

BLです。（物語の前半ほとんどがセツ・スです）  
エロいです。

ドS・変態攻め、ツンデレ受け です。多分それ以外はありません。

15歳未満の方、BLが嫌いな方は見ないでください。

作者はかなりの腐女子で、BL大好きです。

パクリは禁止します。

荒らしも当然禁止です。

以前、他の小説創作のサイトでファンタジーものを書いていましたが、その小説のキャラクターと全て名前が一致しております。また、キャラ名は一緒でも、設定や内容は変えてあります。けして盗作ではありません。

なんとかこの小説が続くように私自身も頑張りますので、以上のことを守ってくださいな



## 登場人物

### 登場人物

#### ・趙李淋 チアオレイリン

中国出身の男子。年は14 16あたり。特技(?)は赤面。  
約2000年前、中国の冥界(裏世界)に存在していた大妖怪で、色々あつてこちらの世界に転生される。

眼つきが悪い。これは妖怪だった頃かららしい。転生されたときに後遺症として虚弱体質になってしまった。

飛龍という名前の通り龍の形をした妖怪に取り付かれて(?)いるが、本人の正体は九尾の妖弧。

髪と瞳が赤茶色。どちらかといえば赤に近い。

カイによると、容姿はかなりいい、との事。しかし李淋は自覚なし。性格は勝気でツンデレ。気性は荒い。少々野生的な部分がある。

剣術を基本とするが、そこそこ体術を使うこともできる(功夫等)。カイと出会って、しばらく経つまでは病気になる、犯される、喧嘩で負ける、戦闘で怪我ばかりするなどのヘタレっぷりを発揮。いつもカイやリユークの世話になりっぱなし。

しかし彼が元の妖怪の姿に一度戻ってしまった後は、むちゃくちゃ強くなる。その強さは半端ではないらしい。

ほとんど受けの立場。カイに出会うまでは性交・自慰の経験がなかった。感じやすい体質らしい。

#### ・カイ＝シルド

年は李淋と同じくらいだが、若干李淋より背が高い。髪は黒。ゲイ。男に興味があり(特に体)、出会ってすぐ殴ってしまったに

も関わらず、李淋のことをやたら愛している。

面倒なことが大嫌いで、嫌いなことに關してはいつも目が「あーめんどくせえ、誰がやるかつーの」と語っている。

ヘンタイ。超がつくほど超ドヘンタイ。

なぜか勘が鋭い。適当に言ったことが次々と当たっていく。

自分がどんな危機に陥ろうが、あまり焦るようなことはしない。

いつも李淋の事を氣にかけているらしい。

頭は切れるが、あまり自覺はしておらず、いつもぼけっとした態度をとる。

なにかしらの弾みでとんでもないド変態&ドSになる。

李淋とするときは攻めの立場。犯して喘ぎ声を聞かないと一週間持たないらしい。もちろん嘘。

しかしリユークには攻められる。

#### ・リユーク

年は16〜18あたり。李淋とカイより少し年上の青年。

髪は金髪。その辺の散髪屋で適当に染めてもらったらしい。

性格は荒っぽく、まさに「強引」。

見た目が少し怖いため、あまり人からは声をかけられない。

1,2年前まで街中で有名なヤクザグループの仲間だった。

現在は属から抜けて改心し、知り合った李淋とカイに親しくしている。

しかし、改心したとはいえ、あまりの金欠にいつも万引きをしている。万引きのプロ。

他にも、未成年での喫煙、飲酒、無免許でバイク運転など、犯罪を多々犯している。

体格は大きめ。身長は高い。

趣味は夜間俳諧。機嫌が悪いとき、その辺りの家の窓ガラスを素手で割ったりする。

李淋とカイに対しては攻め。何があっても攻めの体制は崩さない。

チャオリンリン  
・趙淋淋

李淋と血のつながった妹。髪は黒。

極度のブラコン。「お兄ちゃん大好き」。

李淋のことを「お兄」と呼ぶ。

李淋が転生される以前は、彼の病気の看病をしてやっていた。

兄の目つきが悪いのに対して、彼女は目がくりくり。割と可愛らしい目をしている。

兄がカイやリユークとよからぬ関係になっていることは知らない。

フェイルオオン  
・飛龍

李淋から抜かれた妖力から成り立った妖怪。

とりあえずはかなり強い。理由は、1900年あたりは生きてるから……らしい。

李淋を現在に転生させた張本人。

会話から、自分よりも李淋（妖怪時）の方が抜群に強いといったことが解る。しかし、人間時の李淋よりは圧倒的に強い。

妖怪ではあるが、外見はまさにただの龍。

・エリス

李淋から妖力を抜いた張本人。

17歳あたり。

その若さにもかかわらず、冥界全てを征服するという大志を抱いている。そのため李淋の妖力を抜いた。

しかし計画は失敗。自信もこの時代に転生し、李淋の力を狙っているらしい。

でもとりあえずは敵。女にしては、戦闘に強い。容赦なし。  
言葉遣いは荒い。

チェンレイレイ  
・陳李李

李淋の幼馴染みの女の子。

カイと李淋が暮らす町にいきなりやってくる。実はその町に親戚がいたらしい。

あまり中国語以外の言葉が上手くないらしく、カタコトで喋ってくる。

何故だか、同じ中国出身の李淋にも同じカタコトの言葉で話す。

最近V系に目覚めたらしく、ブラウスに黒ネクタイ、黒のジャケット等のファッションをしている。

自称「最強にV系な美少女」 通称「駆け出しのなんちゃってV系少女」

決してファッションセンスが悪いわけではない。

いつまで経ってもサイズ違いの中華服を着ている李淋に「そんなだつさいモノ着るずに（着ずに）、もーちよつとオシヤレしてミヨーよ？いつまでもそんなカッコじゃ淋淋チャンが悲しムよー」と言ってくる。

## 登場人物（後書き）

以前書いていた小説にはリユークとか李李はいなかったんですけどね^^;

まだナギは登場させるか不明です（汗

空には灰色の雲が広がっていた。

その空の下の地面には、赤髪の少年が横たわっていた。と言っても、起きてはいるのだが。

（何処だ、此処・・・）

その少年はゆっくりと体を起こした。

少年は、名を趙李淋<sup>チアオレイリン</sup>といった。

彼の眼差しは、鷹のように鋭かった。

（まったく、ひどい目に合ったぜ・・・。これからどうすればいいのかが分からねえ）

李淋はそう思っただけ立ち上がり、手についた砂をはらった。同時に何度か咳き込んだ。まだ熱は残っている。

彼は重度の虚弱体質であった。幼い頃から色々な病気にかかっては、寝込む毎日を繰り返していた。

（さて、ここからどうするかが問題なんだよな・・・）

李淋には行くあてが無かった。

それにもともと、約5分ほど前は中国の冥界にいたのである。

それが今は自分でもわからない、町外れの道にいたのであった。

（こうなったのも全部あいつのせいだぜ）

李淋は力の抜けた足取りで、息を切らしながらふらふらと歩いた。

適当に歩いているうちに、知らぬ村に行き着いた。

しかし、この村はどうもおかしいのである。

まず、人がいない。それに音ひとつ聞こえない。

（誰でもいいから誰かいないのか・・・？）

そう思っているうちに、異臭が漂ってきた。

「うわ、くさ・・・」

李淋は異臭に顔を顰める。

（どうする俺・・・引き返すか、それとも進むか・・・。あれ、ひよっとして・・・）

李淋は何かに気づいた。

誰かが歩いている。

（なんだ、人、いるじゃねえか）

李淋は安心して力が抜けたのか、その場に座り込んだ。

しかし、その人影は李淋には気づかぬ様子で、どんどん先を歩いてゆく。

（やべえ、これじゃ助けてもらえねーぞ・・・）

李淋はそう考え、声を上げた。

「おい、そこのお前」

その人影は李淋のほうをくると向いた。

「お前この村の奴か？俺より逃げるの遅かったんだな」

そいつはニタニタと笑っていった。

そいつは黒髪の姿勢の悪い少年だった。

「逃げるって何で・・・って、とにかく俺を助けてくれよ」

李淋は早口で言った。さつきから気分が悪くてたまらないのだった。

すると、その少年は変な目をして言った。

「何を助けるんだ？てゅーかお前みるからに怪しいし・・・敵か？」

「はあ、何を勘違いしてんだよ、敵だの味方だの俺は・・・」

「よーし、じゃあこの村を出てすぐのところだからーく対決でも

してやるーじゃねーか」

（何だコイツ！？話が飛んでないか！？）

李淋は明らかにこの男は変だと思った。

「いや、俺はやっぱいい、っ、うあっ！？っ、掴むな！！」

李淋はその少年に襟を掴まれ、そのまま村の外へ引っ張られた。

「おっしや、よし、お前早く立て！」

その少年は村を出てすぐのところで李淋の襟を放した。

「いつ・・・て・・・何すんだよ・・・」

「俺が勝ったらお前をここに置き去りにして俺はどこかに行く。で、逆にお前が勝ったら俺はお前を助けてやるーじゃねーの。それにしても・・・最近体動かしてなくてかつたるいんだよね、久しぶりの喧嘩だな」

その少年は張り切っている。よほど自信があるのだろうか。

（この展開、速すぎるだろ・・・俺絶対勝てねえ・・・）

「おっしやあああ！！じゃあいくぜえ！！！！」

その少年はこう叫んだ。

李淋はその叫び声が聞こえたすぐ後、4、5メートル先にぶっ飛ば

された。

顔面に思いっきり拳を食らったのだった。

そして強く地面に体を叩き付けられた。

「うつ・・・」

李淋は地面に横たわったままうめき声を上げた。

「・・・なんだ？お前・・・抵抗なし？楽しくねー」

少年は狐に摘まれたかのような顔をして、李淋の顔を覗き込む。

「大丈夫か？」

少年は李淋に手を差し出す。

「チツ、うるせーな」

李淋はその手を振り払って体を起こす。

（いきなり殴ってきたやつなんかの手エ借りるわけにいくかよ）

李淋はそう思った。

すると少年はニヤニヤしながら言った。

「何だぁ？お前、その態度・・・。絶対後悔するぞー」

「はあ？お前、何言つて・・・っ！！バカ！だからそこ掴むなつて  
！」

李淋はまたしても襟を掴まれ、近くの宿まで引つ張られた。

黒髪の少年は李淋の襟を掴んだまま、宿に滞在の契約を済ませた。

そして乱暴に李淋を部屋の中に入れた。

「バカ野郎が、勝手にこんなとこ連れてくるんじゃないよ！」

「今すぐ後悔させてやるから待ってろ」

少年は部屋のドアを閉め、鍵をかけた。

「これで外からは誰も入ってこれねえな・・・」

「お前、誰なんだよ・・・何が目的でこんなこと・・・」

「お前にちよつとお仕置きをしようと思ってな・・・。俺は力イシルドってんだ。カイって呼べや。お前は？」

「・・・趙・・・李淋」

李淋は言いたくなさそうに自分の名前を呟く。

「ああ？変な発音だな、さてはお前、中国人だな？」

「・・・まあな」

「・・・つと、そんなおしゃべりはどうでもいい、今からお仕置きタイムだ」

カイはニヤリと笑った。そしてその瞬間、李淋をいきなり部屋の床に押し倒した。

「いてっ！！テメエ、何しやがるっ・・・」

カイは李淋の上に馬乗りになって、李淋の両腕を片手で押さえつけた。

「へへっ・・・これで動けねえだろ？」

「クソッ・・・そこどけ！」

李淋は腕を掴まれている手を振り払おうとしたが、上から押さえつけられているため、振り払うことはできなかった。

「そう動くなって・・・」

カイはもう片方の手で李淋の顎を掴んだ。

「眼つきはひたすら悪リーが、綺麗な顔してんなあ・・・」

「うっ、うるせえ！！」

李淋は顔を真っ赤にして怒鳴った。

「その元気もいつまで続くか楽しみだぜ・・・」

カイはそう言って李淋の股座に手を伸ばす。

「ひっ・・・バカ、やめろって!」

「バカだあ? お前のほうがバカじゃねーか、やめろって言われてすぐやめる奴がいるわけねーだろ」

「——っ!」

李淋の体がビクリと動く。

「なんだお前・・・もう感じたか? これ結構ソフトだぞ?・・・ひよっとして、初めて?」

「っ・・・そうに決まってるっ・・・あぁっ!!」

李淋は小さく喘ぐ。

(っ・・・、やべえ、声出しちゃあ・・・なんとか持ちこたえねえと・・・)

カイは小刻みに震える李淋を容赦なく犯し続ける。

「ふーん、初めてか・・・。苛め甲斐があるな」

「あ・・・っ・・・、痛い・・・あぁっ!」

李淋のズボンが徐々に濡れてくる。

「濡れてんなお前、そろそろイクか?」

カイは李淋のズボンを緩め、中に手をつ込みながら言う。

「いつ、嫌だっ！！あっ……うあ……」

「イキたくないのか？まあいいさ、俺が無理にイカせてやる」

「痛い、マジ痛いって……！っ……うっ……うあああっ！  
！」

その時、李淋の熱いものが一気に外へ解き放たれた。

カイの手は白濁でぐちゃぐちゃになった。

「イツたな、李淋……」

カイは厳かに言った。そのとき、初めて彼は名前を呼んだ。

「う……っ……」

（もう……何がかんねえ……）

李淋は気の抜けた自分の眼を閉じた。



カイだった。

カイはまだ静かに寝息をたてて眠っている。

（つていうか、なんで同じベッドなんだよ！？何かすごい嫌な予感がする！！）

李淋は飛び起き、慌てて室内を見回す。

そして自分が寝ているベッドは、

・・・ダブルベッドだった。

「うあああああつ！！！！予感的中した！！！！」

思わず李淋は叫んだ。

その声でカイは目を覚まし、頭を掻きながら起き上がった。

「・・・ん、あ・・・」

「ひいっ！！」

李淋は悲鳴を上げた。

完全にカイに警戒心を持っている。

「・・・ああ、れりん・・・じゃない、りーりん、いや違った・・・名前なんだっけ」

「ばつ、バカヤロー、テメエに教えるつもりはねえ！！それに一回教えてる！！」

李淋は呆れた。自分でもカイの名前を覚えていたというのに。

「ええと、・・・じゃない、りいれん・・・ああ、れーりんか」

「れ、れーりんって・・・」

確かに合ってはいる。しかしかなりの棒読みっぷりである。

「発音が間違ってるって言いたいんだろ？わかってるよ、れいりんだろ」

「うん・・・」

「ったく、せつかく人がお前のこと持ち上げてベッドに入れてやったのに、そんなこといちいち不満言つなよ。服だって脱がしてやったのによお・・・」

カイは急にキレはじめる。

「え？服・・・？」

今気づいてみれば、・・・着衣していない・・・。

恐る恐る李淋はカイのほうに目を向けると、カイは不適にニヤリと笑った。

「お前が寝ちまった後も、お前の体、たっぷり頂いたぜ！お前、溜

めてただろ」

「違う！っていうか、嘘だろ！？絶対嘘だ！！」

「嘘じゃないし・・・」

カイは平然として言う。そして続けた。

「お前も本当は気持ちよかったんだろ？俺はわかってるぜ」

「ちっ、ちげーよ！！別に・・・全然気持ち良くななんてなかったし・・・」

李淋は必死に否定する。

「いやあ、気持ち良くなかったらあんな声出ねーっつの・・・」

（俺、そんなにやばい声出してたのか・・・？）

李淋は不安になる。

「よし、じゃあ、これからお前が俺に逆らったらお仕置きな」

「はあ！？バカ言っでんじゃねえよ！気違いにでもなったか？」

カイはさっきよりももっと黒く、ニヤリと笑った。

「はい今、逆らった」

「違う！！今のナシだ！！」

「門等無用・・・」

「ほんとにちがうって！ちが・・・んっ・・・うう」

カイは李淋に口づけをする。

始めはお互いの口を重ねる程度だったが、カイは急に李淋の顔を引っつかみ、一層自分の顔に引き寄せる。そして強引に李淋の口内に自分の舌を押し入れた。

「ううっ！！んうう・・・くっ！」

口内に舌を入れられ、何度も李淋の舌にカイの舌を絡めさせる。

徐々に体が火照って、少し感じてきてしまう。息もできない。

「うっ・・・く、あ、いつ・・・！！！」

動いた瞬間、舌に痺れるような痛みが走った。カイに噛まれたらしい。

「うぐうっ！！んぐっ・・・うう・・・ぶはあっ！！」

李淋はなんとか自分の口とカイの口を引き離した。

「このアホ！！何てことさせやがるんだよ・・・っ」

李淋はカイに怒鳴った。

「お前が逆らうからだろ？それにお前の唾液、血の味がした・・・、さてはお前、キスしてる間に血イ吐いたな！？」

「バカかテメーは！お前が俺の舌嚙んだだろーが！！」

李淋は反論する。

「何だその口の利き方は！！お仕置きされたいからそんなこと言ってるんだろお前！？」

「げっ！言っちゃった・・・」

李淋は戸惑う。それをカイが見て言った。

「まあ、今日のところはこれでカンベンしてやる。ありがたく思え」

カイは上から目線をする。

「わかった、ありがたく思っとくよ」

李淋はどうでもよさそうに言った。が、内心はこうだった。

（けどコイツ、なんで会ったばかりなのに、こんなに俺とエロイことが出来るんだ？）

李淋は朝目覚めてから、ぼけっとしている。

今も宿の椅子に腰掛けたまま、さっきから遠いところを見ている。

(・・・アイツと・・・、キス・・・しちまった・・・)

李淋は完全にふぬけとなった。

キスされた直後は興奮していて、何か喋っていないと身が持たなかったが、しばらく経つてみると何とも変な感じである。

(それに昨日は・・・せ・・・セツ・・・セツ、ク・・・・・・ま  
で・・・)

李淋は昨晚のことを思い出した。正確に言えば、思い出したのではなく、思い出してしまったのだった。

思い出したくも無いことを思い出してしまったせいで、李淋は急に赤面した。

(やつ、やべえ!!!なに赤面してんだ俺!!!くそ、さっさと戻れ!)

李淋は自分の頬をバシバシと叩いた。

「なーにやってんだ李淋・・・」

カイはその様子を見て、立ったまま李淋の顔を覗き込む。

「わっ！？カイ・・・！？」

李淋は急にカイと目が合い、驚いた。

「お前顔赤いな、さてはお前々？？」

「な、何も思い出してねえよ！！お前は関係ないだろうっ！？どうか行けっ、畜生！！」

カイはお決まりの笑いを浮かべて言った。

「お前、昨日の晩のことと、今朝のこと、思い出してただら・・・」

「ちがう！！ちがうってば！」

李淋はひたすら否定する。

しかしさつきよりもつと顔は赤面している。

「ふん？へえ？ほお・・・」

カイは疑いたつぷりの声を出し、今朝キスした時のように李淋の顎を掴んだ。

その掴んだ手には力がこもっていて、少しの痛みすら感じさせた。

「まあいい、また今度連続で何度もイカせてやるから覚悟しときな」

「くっ・・・」

李淋は恥ずかしいのか悔しいのか分からない感情で一杯になった。

そのうえカイの顔が半端なく近いため、吐息が顔にかかる。

少しずつ戻り始めた顔色も、またかぁと赤く染まった。

そのとき、カイが急に声を漏らした。

「あー、やべえ・・・」

「え？」

そしてカイはいきなり意外なことを呟いた。

「やばい、お前、むっちゃ可愛すぎる・・・」

カイは李淋から目を反らした。

「っ！そんな、可愛いなんて言われたかねーよ・・・」

李淋は熱くなりながら言う。

「くっそー、お前ってやつぁ、何回顔真っ赤にすれば気が済むんだっ・・・!」

カイはそう言っで、立ったままの状態です淋を抱き締める。

「うわっ！？バカ、抱きつくなくて!!」

李淋は泣きそうな顔をして拒んだ。

しかし本当はカイに抱かれて、恥ずかしさの絶頂に立っていたのであった。

（駄目だ、このままじゃ俺・・・壊れるって！！なんでこんなに熱いんだよ！！）

今体温を計れば38度を軽く超えそうな気すらしてきた。

「あ、あう・・・カイ・・・放してくれ・・・っ・・・ひぐっ・・・」

「

李淋は必死に声を上げたが、泣き声のような声しか出てこなかった。

カイは李淋から離れるように腕を放した。

「バーカ、ちよつと抱いたくらいでそんなに赤くなってるんじゃない、後から困るぜ？」

カイの態度は一変した。

「まさか、テメエ・・・さっきわざと抱いただろ！？」

李淋が訊くと、カイはぺろりと舌を出した。

「ばつ、バカヤローが！！そんなんで俺が興奮するわけねーだろ！！全然、嬉しくなんてなかったからな！？」

李淋はまたもや必死に否定したが、もちろんカイには嘘だとばれて

いた。

「へへっ、それは本当かあ??」

「本当だっ!!」

「それじゃあ、俺が抱いたとき、あんなに真っ赤になってたのは何故だ?」

「そっ、それはっ!!」

「言えねえだろ。じゃあどうしてあんなに体温まで上がったんだ?」

「さあな!! 熱でもあるんじゃない?」

「そうなのか!? じゃあ今すぐ治さなきゃな、病気　キスして俺に移せ!!」

カイは笑いながら言う。

「ちっ、ちが・・・誰がするか!!」

李淋はそのあと何分も何十分もカイにからかわれ続けた。

「よし、じゃあそろそろ出るか」

カイは荷物を持って李淋に言った。

二人は宿に泊まっていたため、もう出ることにした。

宿から出て、不意にカイは言った。

「あれ、これから俺どこ行くか決めてなかった」

「は？」

李淋は哑然としてカイの顔を見る。

「うわー、しまったー・・・これからどこ行く」

カイはのん気である。

「どこ行くか決めてなかったのか？」

李淋はあきれた。

「うん。決めてなかったぜ」

「・・・あつそ。じゃあ、せいぜい頑張りたまえ。世話になったな」

李淋はボソリと呟いた。そして歩き出そうとする。

「待て李淋」

「なんだよ」

「お前は俺の友達だ。フレンドだ。親友だ。ダチってもんは、困ったときに助けあうもんだよなあ？」

「だつ、誰が親友だ！！俺はお前と親しくなった覚えはねーぞ！」

李淋はお決まりの否定をする。

「ダチだから同じ部屋に泊まったんだろ？そしてやっただろ？俺とお前は・・・いわゆるセフ」

「最後まで言うな！！つーかそんな言葉ホイホイ使ってんじゃねーよ。じゃあ俺は行くからな」

李淋はその場から立ち去ろうとした。

「待てって言っただろ？李淋。俺が宿の金払ったぞ」

「あれは強引に俺を引っ張っていったからだろ？」

「かーねかーえせー」

「嫌だ！」

李淋はぱつさりと切り捨てた。すると、カイは人格が変わったかのようになり、ドSになった。

「ほお・・・強情だなあ？しかしお前は一人で出て行ってもこの地形を知らないだろ？」

「なんとかするさ」

李淋はなんとかする自信はなかったが、適当にそう答えておいた。

「病弱なお前に何ができる？」

「な、何でその事知って・・・」

李淋は自分が病弱だと言う事を見透かされ、戸惑った。

するとカイは、まるでドラマに出てくる名探偵のように語り始めた。

「まず、俺とお前が最初に会ったとき、お前は何と言ったか？『俺を助けてくれよ』と言ったな？でもそのとき、お前は何も外傷は負ってない。だからこういう場合は大抵体調不良か何かだ。そのときのお前の顔色はまあまあ悪かったはず。そして殴ったときにも抵抗なし。よって・・・」

「・・・」

そのときカイは急に元の性格に戻った。

「つと、この推理、全部勘でした。まさか、当たった？」

「見事にな」

「おお！！俺って勘鋭い！！」

カイは妙にテンションを上げた。

「おい李淋、この勘の鋭いカイ様についていくなら、金返さなくていいぞ」

「もともとから金返すつもりなんてねーし・・・ったくよお、ついていきやあいいんだろ？」

「素直じゃねえなあ。本当は『俺は一生この人についていくぜ！でも素直になれねえからここで一応ツンツンしとくか』って考えてるんだろ？」

「アホかテメエは！！俺はツンツンでも何でもない！」

「お前はツンツンだろお！！」

「違う！」

「李淋、お前が好きだ！」

カイは急に話を外れさせた。

「あわっ！？な、何いきなりそんなこと言っただよ！」

李淋は急な一言に顔を赤くした。

「ほら、テメー、すぐ顔赤くなるだろ？日頃あんなにツンツンしてるのに、こういう時だけデレるんだよなー、お前は！そんなのをツ

ンデレって言うんだぜ！？多分」

カイはすべてをお見通しだった。

「ちっ、違っつー！！んあことあうわけな・・・」

「デレ過ぎでロレツが回らないか？」

カイはニヤニヤしながら李淋の顔を覗き込んだ。

「うう・・・」

李淋は反応に困り、うつむいた。

「へへ、やっぱりお前は・・・ってあゝあゝ！！行くところ考えてねえー！！」

カイは思い出したかのように叫んだ。

「は、早く考えろよ！俺もついて行ってやるからさー！！」

「やっぱりお前俺と一緒にいたいんだな」

「そっちに話を持っていくな！」

「持っていきたくなるんだよ、李淋、お前が好きだ。これは本<sup>マジ</sup>気だぜ？」

カイはそう言って李淋の額に軽くキスをした。

「!!!!!!わ・・・、あうっ」

李淋は赤面のし過ぎで卒倒した。

カイはそれを見て呟いた。

「おいおい李淋ー、今日お前興奮しすぎじゃねーの?」

## 5 (後書き)

はじめまして。川崎美鈴です。

李淋はいくらなんでも赤面のしすぎです／＼／＼／＼／  
けどこんな設定なんで許してくださいな  
わたくしツンデレをこよなく愛しておりますので

二人は行くあてもなしに、道を歩いていた。

「なあ李淋」

「何？」

「なんでお前ここに来たんだ？」

カイは突然聞いた。

「え？何でって・・・」

「何等かの理由がないとこんな辺鄙なところ、来ないだろ？」

「うー、確かにそうだけど・・・」

「で、結局なんで？」

カイはわりとしつこい。

「来た・・・っていうか、飛ばされたんだよ」

「飛ばされたあ？」

「そう」

カイは疑わしそうな目で李淋を見る。

「誰に飛ばされるんだよ、台風か？大砲か？」

「バツキャロー、んなわけねえだろお？・・・ほんとのこと言っけど、多分お前信じないと思う。」

「まあ信じるか信じないかは話次第だな」

カイはめんどくさそうに言う。

「俺、実は妖怪なんだけどさ・・・もともと人間だったのに」

「妖怪っ！？・・・で、続きは！？」

カイはかなり驚いた。

「・・・その俺を妖怪にしたヤツに、ここに飛ばされちゃった」

「そ、それだけか？」

「そうだけど？」

「その妖怪にしたヤツって・・・どんな」

カイはだいぶ落ち着いて訊く。

「赤くて・・・妖怪とか言ってるけど外見はただの龍で、そうそう、名前が飛龍フェイルウオンってんだ」

「強いのか？」

「知らん」

「どんな風にして妖怪になったんだ？」

カイはやはりしつこい。

「俺が外で昼寝して、起きたらそいつがいて・・・俺の体に猛突進してきて、・・・中に入っちゃった」

「それから変化は？」

「俺の見かけがめっちゃくちや変わったよ!!」

李淋はイライラしながら言う。

「え、じゃあもともとどんな格好だったんだ？お前」

「こんな赤茶色っぽい髪じゃなかったし・・・俺黒髪だったんだぜ？それになんか・・・牙が・・・」

「牙？」

「吸血鬼みたいに牙が生えててさ、まあ吸血鬼なんて見たことないけど・・・それと目の色が赤っぽくなった・・・」

「かわいそうになあ、赤毛に赤目か。ああ、最初見たときに何かお前変だなと思ったら、牙が生えてたのか」

「やっぱり気づいたのか、コレ」

「かつこいいじゃん。コスプレみてえ」

「かつこわりーよ！！いつ舌嚙むかわからねえし」

「おお怖え」

「んで、そいつが言ってたんだけど、俺、狙われてたらしい」

李淋は声を落として言った。

「狙われる？誰に」

「冥界の奴等だよ、俺を生け捕りにして妖怪だけを奪おうっていう魂胆さ」

「ひでえ奴ら・・・」

「捕られるのもムカつくし、いつそのこと俺が何かの激しい病気で死んだら早いよなーとも思っただけど」

するとカイは叫んだ。

「バカヤロウ！！お前は死んだら駄目だ！！俺の最愛の友が死んでしまっただろう！！」

「何が最愛の友だ！！変なことばかりしてくるくせに！！」

「俺は普通だ！！」

「お前はまともじゃねえ!!」

「欲求不満だ!!」

「知るか!!」

二人の口喧嘩が始まった・・・

## 7 (前書き)

これは中国での話。

ここは中国の冥界。いわゆる裏世界である。

冥界と聞くと、暗そうなイメージがあるが、実際は本当の中国とあまり変わりはない。

しかし、不便なことに、怪しい者が非常に多い。

年間、その者共に連れ去られる人も少ない人数ではなくなってきた。  
いる。

そんな少し怪しい町に、その少年はいた。

少年の名前は趙李淋。だいたい14〜16歳くらいに見える。

外見は悪くない、というより、むしろかなり良い。肌は薄い肌色で、髪は黒く艶があり、清潔感を醸し出していた。

ただ、問題は目つきである。李淋の目は狼の目や鷹の目に見えるのだ。そのせいでもあり、初対面の人物は、少し戸惑うことが多い。

ただ、目つきは悪いが、瞳は澄んだ茶色で、初々しさがあった。と同時に、何か淋しさを感じさせるような瞳だった。

性格は少し荒く、野性的なところがある。しかし、他人に被害を催すことはなく、親しい人に対しては優しく接している。

彼はいつもサイズの大きいブカブカの中華服を着ていた。そのあた

りの好みは少し疑える。

そして彼を悩ませる一番の原因となっているのが、自分の体質であった。

彼は驚くほど体が弱く、幼い頃から病気にばかりかかっていた。

彼は今、中国の冥界にある大豪邸に住んでいた。

李淋の一家は超大金持ちで、暮らしは裕福だった。

しかし、親はあまり子供にかまわず、最近となつては、顔を合わせないことすら多くなつてきた。

李淋には3つ年下の妹がいた。

その子は名前を淋淋<sup>リンリン</sup>といい、お兄ちゃん大好きな子であつた。

そのため、李淋とその妹は大体いつも一緒にいた。

だから、李淋はあまり生活で困るようなことはなかったが、何か物足りなさを感じながら生きていた。

そんな彼の身に異変が起ころうとしていた。

「あー・・・いててっ・・・」

李淋は起床したときから何故かしら肺のあたりが痛かった。ちなみにおとといは頭痛の日だった。彼にとって、目覚めのいい朝なんてものは存在しない。

「どうしたのお兄？またどこか痛いの？」

淋淋はお絵かきの途中で李淋に言った。

「いや別に・・・」

李淋は適当にそう返しておいた。

「ふーん？そう」

淋淋は一度李淋の方に目を移したが、またお絵かきを再開した。

（あー、だるいな・・・外で一眠りするか）

李淋は1階に下り、ベランダに出た。

そしてその芝生の上に横たわった。

ベランダに出て横になるのが彼の習慣であった。

（なんか・・・ねえかなあ・・・）

李淋は退屈しながらも、睡魔に襲われてそこで眠ってしまった。

どれくらい時間が経っただろうか、李淋は目を覚ました。

するとそのとき、李淋の目の前に、大きな赤い龍がとぐろを巻いていた。

李淋は驚くも何も、そんなもの通り越して、声が出なかった。

「そこのお前・・・」

龍が李淋に喋り掛けた。

「あ、あ・・・っ」

李淋は声にならない声で何かを言おうとした。

「お前が、趙李淋か・・・？」

「あ、は、はい、いやその・・・ちがつ・・・」

李淋は龍の恐ろしさに、わけのわからない返事をした。

「お前は趙李淋かと聞いたるんだ」

「はっ、はい！」

李淋は返事をした。

「そうか、まあそう怯えるな。すぐ済む・・・」

「え、すぐ済むって・・・」

李淋は急に怖くなった。すぐに済むというのは、今すぐ自分が殺されるのではないかと勝手に想像したからである。

そしてその瞬間、その龍は李淋目掛けて猛突進し、李淋の体を通り

抜けた。

「っ！？あああああっ！！！！」

李淋は地面に叩きつけられるような衝撃に襲われた。

ジェットコースターの100倍以上の威力があつて、体の一部がぶつ飛ばされるのではないかと思つたほどだ。

そして周りで突風が吹いたかと思うと、すぐに風は治まった。

李淋は完全に全ての力を抜かれてしまい、ガクリと首を項垂れさせた。

そして霞み掛けた視界で周りを見る。

龍は消えて居なくなっていた。

自分の体を通り抜けた、というよりその龍は貫通した。けれど、なにも被害はない。

(・・・何だ・・・今の)

李淋は混乱したまま座り込んでいた。鼓動は激しく鳴っていた。

そのとき、また急に体に強い衝撃が走った。

全身に痺れが起き、冷や汗が流れた。

「っ！！っっ・・・うえっ・・・おえええっ！！」

李淋はその場で嘔吐した。

ビトビトと汚い音を立てて、吐物が地面に流れた。

息が苦しくて、李淋は何度も咳をした。全身の力が抜け、うまく動けなかった。単なる嘔吐ではないらしかった。

（ちょっと・・・これ、マジでヤバい気がする・・・体が・・・言うこと聞かねえ・・・っ！！）

李淋は口を拭い、よろめきながら立ち上がった。その足取りは、そ辺りを歩いている酔っ払い同様だった。

李淋は今すぐにでも自分のベッドに入りたかった。そして1日中眠ってしまいたかった。

家の中に入り、自分の部屋のある二階へと向かったが、階段が気の遠くなるほど長く見え、何度も段差に足を捕られた。

そしてやっとの思いで二階へと上がった。

「っ、ううっ・・・ゴホッ、ゲホゲホゲホッ・・・あ、・・・り・・・淋淋・・・」

李淋は消えそうな意識の中、妹の名を呼んだ。

「なあに？お兄、呼んだ？」

淋淋は李淋の方に来た。

「お兄？・・・どうしたの！？」

淋淋も兄の異変に気づいた様子である。

「い、今すぐ・・・俺の・・・部屋に・・・、あ・・・、うぐっ！  
！」

「部屋！？お兄の部屋に連れていけばいいのね？お兄早く捕まって」

李淋は淋淋の肩に腕を掛け、何か呻きながら自分の部屋へと向かった。

そしてベッドに倒れこんだ。

「お兄？苦しいの？」

「う・・・ゲホゲホッ！！」

「お兄！！死んじゃ駄目だよ！！？」

淋淋は兄の背中をさすりながら言う。

「バカヤロー・・・このくらいで死ぬか・・・ゲホッ！」

「お兄、なんで急にこんな・・・また発作が起きたの？」

李淋には持病がいくつかあった。成長するにつれ、あまり発作は出なくなっただが、たまに発作が起きると、その影響はなかなかひどいものだった。

「いや・・・多分が・・・」

そう言い掛けたところで、李淋は考えた。

さっきあったこと全てを妹に知られて心配を掛けてしまうのではないかと。

「ああ、また発作だ・・・」

李淋は言い直した。

「そうなの・・・すぐ治まればいいけど」

淋淋はそう言ったが、李淋の状態は快方に向かいそうになかった。

李淋に妖怪が取り付いてから5日が経った。

徐々に病状は良くなっていたが、彼に大きな変化が起こっていた。

夜、淋淋は兄の容態を見るために李淋の部屋に入った。

李淋は目つきの悪い目を大きく見開いたまま、ベッドに仰向けになっていた。

「お兄、もう……」

「そんなに？」

「……うん」

李淋は外見がすっかり変わってしまった。

真っ黒だった髪が茶色の混じったような汚い赤毛になり、茶色だった瞳も赤色に変化していた。

「淋淋、鏡……」

李淋は静かに言った。

淋淋は黙って兄に手鏡を渡し、目をそらしたままつむいた。

「……ひどい変わりようだな、以前の俺の名残もねえ……ある

とすれば目つきだけだな」

「お兄・・・」

こんなに外見が変わるなら、目つきのひとつくらい変えてくれたっていいのに・・・と李淋は思った。

「なんでこんな風になっちゃったの？」

淋淋は彼が妖怪に取り付かれたことを知らないのだ。

「俺もわかんねえよ」

李淋は適当に言っておいた。

「もう遅いぞ、お前は寝ろ。迷惑かけたな、すまん」

「うん、いいけど・・・お兄、大丈夫？」

「大丈夫、心配すんなって」

「わかった、おやすみ」

淋淋は部屋から出て行った。

李淋はそのあとすぐに消灯した。

（これ以上、あいつに迷惑かけるわけにもいかねえ・・・それに、こんな姿、親にバレたら・・・）

李淋はこの姿になって、一度も親と会っていない。

会わないように、なんとか妹に協力してもらったのだった（元からあまり両親は構ってくれないため、姿を見せないのは容易かった）。

（でも、どうしたらいいんだよ・・・）

李淋はため息をついた。

そのとき、頭の中に誰かしらの声がかすかに響いた。

——随分困つとるようだな

「・・・！？だつ、誰だよ・・・？」

李淋は誰なのか分からぬ相手に聞いた。

『わしだ、李淋』

今度ははっきりと聞こえた。

（っ、あのときの、龍・・・じゃなかった、妖怪・・・！？）

「お前、あのときの、」

『声に出さんでいいわ、全部聞こえとる』

（なんだコイツ・・・心が読めるのか？）

『そうだが』

（おいテメー、なんで俺に取り付いたんだよ！！）

『取り付いた・・・とは失礼じゃな、妖力を再生させるためにもう一度わしをお前に封印してやったんじゃ』

（封印してやったあ？俺はありがたくもねえ！！それにもう一度つてなんだよ！）

『ああ、そうだった、この話を最初にしないといけなかったな・・・。  
。単刀直入に言うとお前の前世は、大妖怪だった』

（ダイヨーカイ？んなもん信じ・・・）

『いいから聞け。お前は今から2000年ほど前にこの姿で生きていた。そのときお前は人の形をした妖怪だった。その力はバカでかいもんで・・・』

（・・・それでどうなったんだ・・・？）

李淋は半信半疑ではあったが、少し落ち着いて話を聞いた。

『それで、お前の妖力を狙うものが現れて、お前は捕らえられよつた。ダサ・・・あ、いやなんでもない』

（お前、今「たった何人かの人間に簡単に捕らえられるなんてダサイ」とか思っただろ）

『別にそんなことは思ったらん・・・多分。まあ続けるが、捕らえられたお前は妖力を抜き取られてしまったんじゃ・・・。しかし、

普通、妖怪つてのは妖力を全て抜かれると死んでしまっただが、なぜかお前は死んでいなかった。瀕死状態じゃったがな・・・なぜかわかるか？」

（・・・妖力つてのが、少し残ってた？）

『よく分かったな。・・・しかし、お前から妖力を抜き取ったのはいいが、急に冥界が一気に崩壊し始めた。それはお前が冥界の中で、一番最強の妖怪だったからだ』

（最強だった？なんで俺が妖力を抜かれただけで冥界が崩壊したんだ？それに少し妖力が残ってるんなら全部崩壊することないんじゃない？）

『もちろん全て崩壊したわけじゃない。ある一部だけは無事じゃった。しかし、もう100%中99%くらいが崩壊してしまったんじゃない。冥界の結界はお前の自覚がなくても、お前の妖力によって自然に守られてきた。それが無くなると結界が解けて崩壊するわけじゃない。・・・んで、そのお前の抜き取られたほとんどの妖力がこのわけじゃない』

（は？妖力がお前？お前妖怪じゃねーの？）

『妖力があまりにも多すぎて、ひとつの妖怪として成り立ってしまったんじゃない。それでわしは冥界をもう一度復活させるために、お前の妖力を奪った野郎共からうまく逃げ出して、お前の体中にまた入ろうとした・・・しかしな』

（あ？何かあったのか？）

『お前の体内に俺が入ろうとする度に暴れてそれを拒んだんじゃ』

（あれ？俺って瀕死状態じゃなかったの？）

『そうじゃ。実験室の寝台の上でお前は意識を失った。だからわしは今なら軽く入れるだろうと思っていた、だが少しでも触れようもんなら、お前は瀕死状態にも関わらずギャーギャー喚いて、暴れやがった。完全にわしを受け付けなかったんじゃ』

飛龍は皮肉っぽく言った。

（んで結局、なんで俺をここに転生するハメになったんだ？）

『お前が暴れ回ったときに、アホなお前は寝台から落っこちよった。・・それでお前は頭を強打して、頭と口ん中から血イ流して完全に動かなくなっちまった』

（あ、アホなのは俺じゃねえ！無理に入ろうとしたお前のせいだろ！？）

『まあ聞け。それでわしはあと1分もお前の命が持たないだろうと判断して、この世界に転生することにしたんじゃ。それでお前はここの家庭の長男として生まれてきた。』

（・・・俺、元からこんなに体弱かった？）

『いや、それは転生したときの後遺症じゃ』

（おいテメーなあ！俺がこのせいでどれだけ苦しんだと思ってんだよバカ・・・てゆーかこれから俺、どうすればいいんだよ・・・そ

れを教えろ！)

李淋は若干キレた。

『お前は妹に迷惑をかけたくない、そしてそのうえ両親にもその姿を見せたくない、というわけだろう?』

(そうだよ！なんとかしろよ!!)

『じゃあお前の望みを叶えてやる、そのかわりしばらくはわしと会話出来なくなるから、氣い付ける』

(はぁ？喋れなくなる？これからどうするつもりな・・・、)

そこで李淋の思考はストップがかかった。

そのとき、もう李淋はベッドの上にはいなかった。

ベッドの毛布の中には、僅かに李淋の体温が残ったままであった。

李淋は飛龍に他の世界へと転生されてしまった。

「ふーん、じゃあお前、普通の中国から来たってわけじゃないんだ」

李淋の話を全て聞き終わったカイはそう呟いた。

「・・・信じてないだろ？」

（俺もあんまり信じられ・・・信じたくないし）

李淋はふてくされたような顔をして下を向いた。

二人は町外れの道を歩いていった。

行く宛てはもちろん無い。

そのあたりの宿で適当に泊まって、翌日にはまた同じように歩くだけだった。

「お前はどうなんだよ？過去は」

李淋はカイに聞き返した。

「うーん・・・、そうだなあ、過去つつたって、10年以上あるかなあ・・・」

「じゃあ一番最近のやつで」

「難しいこと言うなお前・・・。話してやってもいいが・・・いや、

「やっぱお前には早すぎるな！話すのやめた」

カイはアホみたいな声を上げた。

「なんだよ、それって俺が幼児みたいじゃん」

「いや、お前に俺の過去なんか話してもしたら、お前ひっくり返って泡吹いちゃうだろうな」  
「と思ってな」

（・・・ひっくり返って泡を吹く？なんだそりゃ）

「そんなにヤバい過去なのか？アツチ系か？」

「うーん、近いような近くないような・・・」

「あー、もうわかんねえ！教えるよー」

「そんなに聞きたいなら教えてやるよ、まったく！オラ耳貸せよ！」

カイは李淋の頭をひつつかんで近づけた。

「ちよっ、そんなので耳貸さなくていいだろ！？？触摸！混蛋！」

李淋は過敏に嫌がった。

「なんでそんなに嫌がるんだ？それに最後何て言っただか分かんねえぞ？」

「あ、ごめ・・・癖だ、で？何なんだよ」

「ビビるなよ？殺し屋やってたんだ」

カイは声を小さくして言い、そしてニタニタと笑った。

「え・・・？殺し？」

「殺し屋。バラすなよ？ここら辺では有名だったんだからな」

李淋は急に黙った。

「・・・何だ？ひっくり返って泡吹くか？」

「いや別に？」

「何だよ、お前の反応ちょっと楽しみだったのに」

「んで？今は？」

「そーだなあ、この間までやってたから・・・まだ続けてるかな」

カイは表情を変えずに言う。

「誰に頼まれてんの？」

「いろんな人。恨みがあるやつを手紙に書いて俺に送ってくるんだ・  
・・・これも結構イイしな」

カイは指でカネのサインを作りながら言う。

「俺のこと殺すなよ？」

「バーカ、愛する恋人を殺すわけねえだろ？」

「いつ恋人になったんだよ！！」

「出会ったときからずっとだ」

李淋はまた最初に出会ったときのようにならないために、あまり赤面しないように踏ん張った。

「ふーん、そ、そうなんだ」

「あ、そろそろ日が暮れるぜ」

カイは話を強引に変えた。

「ここにも泊まるか・・・。」

カイは李淋に笑顔を向け、宿にスタスタと入っていった。

「せまいな、ここ・・・さすが安いだけあるぜ」

勘定を済ませたカイは部屋に入って言った。

「うわ、ほんとだ」

李淋は部屋を見回しているうち、何かに気づいた。

(・・・ベッドが・・・一台・・・)

「おー、やっぱりお前もアレ見てるな」

カイはとなりでニヤつきながら李淋を見た。

「バカ、一瞬目に留まったただけだ！俺が床で寝るからお前はベッドで寝とけ！」

(なんで当然のようにベッドが一台なんだよ！二人で寝ろってか！)

「なーにを遠慮してんだお前っ！さっさと風呂入って寝ろぞ！」

李淋は知らなかった。

勘定のときに、カイはわざと一人部屋を頼んだことを。

李淋はしばらく風呂から出なかった。

指先から血管が浮き出してきたが、ずっと湯船に入ってたままだった。

「おーい李淋、お前いつまで入ってたんだ！早くあがんねえと覗くぞ  
！！」

「覗くな変態！お前もう入ってるからどうでもいいだろ！」

そう言ったものの、李淋はいい加減上せてしまい、風呂からあがることにした。

着替えてから俺は脱衣所を出たが、やはり問題はベッドだった。

カイは1つのベッドで2人で寝る気満々である。これは非常にアブナイ。

「お前、心配なんだろう？」

カイは笑いながら言った。

「何が・・・」

「わかってるくせに。今日はしねーよバーカ」

「別に何も考えてねーし」

「おら、さっさと来いよっ！寝るぞ」

カイは李淋の腕を強引に引っ張り、ベッドに寝かせた。

「おい、俺まだ全然眠くな・・・」

そう言った瞬間、李淋は背中になにか冷たいものが流れたように感じた。

カイが腹黒い笑みを浮かべながら李淋の上に四つん這いになった。

「っ！テメー、しないって・・・」

動こうとしても、いつの間にか両手が頭上で重ねられ、カイの片手

で押さえつけられていた。

「信じたのか？」

「この、アホ！テメーは何度やったら気が済むんだ！」

カイは李淋が着ているジャージのファスナーを下ろしながら言った。

「まだそんなにやってないぜ？・・・毎晩やらねえと気が済まないかな」

「もう俺はうんざりなんだよ、こんな男同士のキモイことなんか・・・ひいっ！！」

カイは李淋の首筋に舌を這わせた。

「俺は男同士だろうと関係ないと思うが？」

カイはそう言いながら次は李淋の耳や胸元を舐め始めた。

「っ！あ、カイ・・・や、やめっ・・・そこっ、駄目って・・・」

「今日お前がなんであんなに耳打ちを嫌がったかわかったぜ・・・、感じるんだろ？」

「ちがつ、全然・・・」

李淋は凶星だった。

「お前、もう勃ってるんじゃない？」

「しっ、知るか！」

カイは李淋の股座に手を伸ばし、ジャージの上から上下に触り始めた。

「く・・・っ、はあっ！」

「うおっ、勃ってるどころか、濡れてんじゃん！まだ出すんじゃないぞ？あ、そうだ、出てもいいように脱いどけ」

「え、ちよっ！嫌だ、それは無理！」

「ぐっちやぐちゃでどろっどろになったジャージで寝たいのか？」

「・・・。」

李淋は半ば強制的にジャージを脱がされた。

「お前、やっぱりさっきので感じた？」

「バカ、よせ、見るな」

「へへっ、お前がそう言っただけで赤面するところがまた可愛いんだよね・・・」

「う、うるせー、照れるだけならいつでもやってやる！だから離し・・・うっ、く・・・」

カイ露になった李淋の熱い物を弄った。

「ちよつと触っただけで抵抗出来なくなるよな、お前・・・」

「あ、ああ・・・っ!! うっ・・・ぐあ・・・」

李淋はそろそろ本格的に感じ始めた。

「さっきも言っただけど、あんまり早くイクなよ?」

「だったらっ・・・もう少しくらい、弱くやってくれよっ!」

「それじゃ楽しみがねーだろ?」

「離せよ・・・いい加減・・・やだっ、触るな・・・あっ!」

いくら抵抗してもカイは扱き続ける。

「い、いっつ、いあっ、嫌だっ!! あうっ、うううっ!! あ、あ・・・やべえっ・・・!!」

「バカ、早すぎるぞデメー!!」

カイは少し手の力を弱めた。

「あ、ああ、っ・・・くはあっ・・・ああ・・・」

李淋は少し落ち着いていた。

「はあ、お前なー・・・でも、さっきのお前、超可愛かったぜ、声といい、顔といい・・・やっぱ好きだぜ・・・」

「うつ・・・カ、カイ・・・」

李淋はゼエゼエと喘ぎながら小声で呟いた。

「・・・なんだ？」

カイは少し声を落として聞いた。

「俺・・・つ、ああつ、・・・き・・・かも」

「・・・意味わからねー・・・しっかり言いな」

「はあつ、俺・・・も・・・お前のこと・・・」

カイは徐々に赤くなった。

「・・・好き・・・」

いつもの日常では絶対に好きだなんて言ってくれない李淋が、急にそんなことを口にした。

「お前・・・」

「お前って言うな」

李淋は涙のにじんだ目をつつすらと開いた。

「名前で呼べよっ」

「・・・あ、」

カイはこんなに素直になった李淋を初めて見て、少し驚いていた。

「いいからさっさと呼べよ！何回でもいいから！」

「李淋・・・」

そう言った瞬間、カイの手に一気に力が籠り、完全に勃起しまくった李淋の物を、ぎゅっと握り締めてしまった。

「っ！！！あ、ああっ——」

カイの手の中にどろりとした透明の体液が流れ出した。

「あ、あ、すまん、李淋・・・」

「はあ・・・はあ・・・イクとこだった・・・っ」

「今ので、結構濡れたぞ？」

「言っなよ、俺だっけ分かってる」

李淋は恥ずかしいのか、カイと目をそらした。

「もうそろそろ、いいか？」

「・・・イかせて」

「・・・おっしゃ、やってやるーじゃねーの」

カイは自分も熱くなりながら、強く李淋の物を何度も扱いた。

「ん、あ．．．いつ．．．！！カイ、ちよつと．．．痛．．．、痛い．．．強すぎ．．．」

「もうちよつとだから、少し我慢しろ」

「う、うあつ！！．．．はあっ．．．あ．．．はあ．．．うつ、カイ．．．」

李淋はガタガタと震える手でカイの肩に手を伸ばした。

「な、なんだよ．．．そんなにヤバいか？」

李淋は何も答えず、ただ喘ぎながら、自分の上に四つん這いになっているカイの上半身を抱くような格好を取った。

「．．．ごめん．．．わがまま言うけど．．．っ、」

「何だ？今だつたらなんでも聞いてやるぞ」

「．．．だっ、抱かせて．．．く．．．ださい」

李淋が震える声でこう言うと、カイは優しげに笑いながら返した。

「バーカ、お前に抱かれるなんて俺が恥ずかしくてできねえ．．．お前が抱くんじゃなくて、俺が抱いてやんなきゃいけねーだろ？」

カイは李淋を犯しながら覆いかぶさるようにして抱いた。

「お前が俺を抱くなんて、100年早いぜ」

余裕でそんなことを言いつつも、カイにとっては抱き合いながら李淋を犯すのはとんでもなく体勢がきつかった。しかし、李淋に抱いてくれと言われては、それに逆らうことができなかった。

「あ、あ、カイ・・・ちょっと、もう・・・や、やべっ！！いい、イクかも・・・」

「いいから、早くイッちまいな・・・」

下腹部に意識の全てが集中し、李淋の体内にあった熱い塊が、真っ白にスパークした。

「うあっ・・・、あゝああっ！」

カイの手の中に李淋の精液が散った。

「李淋・・・随分気持ちよさそうだったぜ」

「はあっ、そんな・・・ことっ、はあっ・・・ねえし・・・」

「やっとお前・・・俺のこと好きって言ったな」

「え、あ・・・あ、ちがつ！！あれは『好き』じゃなくて『好きかも』だからな！？」

「この、ツンツンめが！！素直になれよ！」

「お、お前なんか、好きじゃない！大っ嫌いだ！」

李淋は否定しながらも、本当はカイに対する思いが少しずつ変わ  
りつつあった。

その夜、李淋は不吉な夢を見た。

その内容はこうだった。

李淋には覚えているはずのない、前世の頃の姿だった。

髪と瞳は燃える炎のように紅く、鋭く尖った牙が生えていた。

そしてどういいうわけか、硬い寝台の上に横たわっていた。

両手、両足を頑丈な金具で止められ、身動きはまったく出来ない状態だった。

「今頃気が付いたか、でもまあ目を覚まさないほうが得だっただろうな」

誰かの声が聞こえた。

自分はまだ霞んだままの目で天井を見た。

（ここ、何処だよ・・・）

そこは、李淋にとって見慣れない場所だった。

とりあえず起き上がろうとした。そのとき、喉に冷たく硬いものが引っかった。

「ぐえっ」

やたら変な声が出た。

首を固定していた金具が喉に食い込んだのだった。手足を固定されているのは知っていたが、首までとは予想していなかった。

李淋には今から自分に何をされるのか薄々気づいていた。

「やっぱり、捕まえたときから思ってたけど、目つき悪りーな」

その瞬間、視界に入った若い男が言った。

目つきが悪いとは、自分のことらしかった。

「おいテメー、こいつにあんまり変なことぬかすな。癪癪おこしたらたらやばいかもしれねーから」

次は荒い言葉遣いをする若い女だった。

二人は李淋の寝ている寝台の前に、向かい合わせになるように立った。

「おいお前」

李淋はどちらに声をかけるでもなく、とりあえず話しかけた。

「なんだ？こいつしゃべったぞ」

男が言った。

「俺をどうする気だよ？まさか、」

「もう気づいているなら話は早い。お前の妖力を抜かせてもらおう」

女は早口で言った。

李淋は一瞬、・・・あつそ、と思った。

しかし、よく考えてみればかなり都合が悪い。

一般 people は、妖怪が妖力を抜かれると、ただの生き物になると思い込んでいる。

しかし、実際は違う。妖怪は妖力を抜かれると死ぬ。

（え、ちよっ・・・そ、それ、俺死ぬってことか！？）

李淋は今頃気づいた。

「おいバカヤロー共！！やめろって、俺よりもっと強力な妖怪が幾万というわ！！そいつらのを抜かせ！」

李淋はやケになってわめいた。

すると男が落ち着いて言った。

「知らねーのか？お前自分のことなのに・・・、お前、妖怪の中で最強なんだぜ？」

「・・・は？」

「悪いが、こいつが言ってることは本当だ」

女は言った。

「う、嘘だ・・・じゃあなんでこんなにあっさり捕まるかよ」

「いかにお前がグズで鈍感でぼけっとしてるのが、」

と、男が言いかけたが、女がさえぎった。

「だからやめとけて。無駄にこいつを怒らせるな」

「・・・」

李淋は返す言葉がなくなった。

「おい、お前は他の部屋に行け。あとは私がやる」

急に女は男に言った。

「へいへい・・・」

男はめんどくさそうに出て行った。

女は、男が出て行ったのを確認してから李淋の顔に手を伸ばした。

「な、なんだよ」

李淋は顔を顰めた。

「お前・・・、妖怪じゃなくて人間だったらよかったな」

女は静かに言った。

「え？」

「お前、目つきはアレだけど、顔は綺麗だよな・・・。とても妖怪の顔とは思えねえ」

女は李淋の顎をくいと持ち上げた。

「私でさえ引っかかりそうになったわ」

「・・・とか言われてもな」

すると急に女は李淋から手を離し、李淋の心臓のあたりの上に手を置いた。

「悪いな、美しい妖怪さん」

女の手から、鋭く、蒼い光が放たれ、部屋中が眩しい光に包まれた。その瞬間、一度李淋の心臓が大きく波打ったかと思うと、急に体中

に激痛が襲いかかってきた。

「ぎっ！！ぐあゝ あゝ あッッ！！このッ・・・テメエ、よせっ！  
！ぐあっ！！」

「勿体ねえ、本当に勿体ねえ！お前みたいなイイ顔の男がこの世から消滅するのは！」

眩しい光の中野空間がよじれ、強い風が吹き、地震のような衝動の中で、女はまるで高笑いするかのように叫んだ。

「ぐウウッ！！！！頼むッ！！もう、終わらせてくれええッ！！！」

激しい痛みの中、必死に思いをぶつけようとするが、女はやめなかった。

「ククッ！ほんとに勿体無い・・・けど、私はねえ・・・」

そして不吉な笑いを浮かべながら続けた。

「お前みたいなやつが苦痛に悶え苦しみながら死んでいくのを見るのも好きなんだよ・・・！！こんな風にな！」

女はさっきの倍の力で両手を李淋の左胸に押さえつけて叫んだ。

「グギイッ・・・く、くそッ！！俺が・・・ゲホゲホッ、何をしたらっていうんだよっ！！！」

「お前は妖怪に生まれてきた、それ自体が罪だ！」

罪という言葉が聞こえた気がした。でも、何が罪なのか、李淋には解らなかった。

李淋の妖力は莫大なため、全て抜くのに時間がかかり、このおぞましい苦痛はいつまでも終わらなかった。

いつの間にか30分が過ぎ、1時間経とうとしていた。

その1時間近くの間、恐ろしい断末魔は部屋中に響きつづけていた。

「う、うツ……ゴフツ!……許し……ガハツ!」

喉の奥から血が噴き出し、顔や髪を濡らし始め、もう喚く力もなく李淋はただ許しを請うだけだった。

「何だ、もつとしっかり言ってみろ」

「許して……くれ……うつ!……!」

段々と妖力が抜かされていき、声が途切れてゆく。

「天下の大妖怪が、許してくれと? せつかくの威厳が台無しじゃないか」

しかし今、李淋はそんなことどうでもよかった。

「くっ……そ……の事……ぜってえ……すっ!」

「だから、ちゃんと喋ってみる。そろそろ最期の言葉になるんじゃないか？」

「・・・す、殺すっ・・・！」

その言葉を言い終わると、急に李淋の真紅の髪と瞳が、こげ茶色になり、真っ黒になった。

それを見て女はニヤリと笑い、言った。

「妖力が全て抜けたということだ、やがてお前は死ぬだろう。・・・殺せなくて残念だったな」

「・・・」

そして、今まで李淋の胸に当てていた手をゆっくりと離れた。

非常に目覚めは悪かった。

多量の発汗をしていた。

やはり、自分はカイに抱かれて眠っていた。

そのとき、急に李淋は妹のことを思い出した。

（こいつにも、俺が迷惑をかけるときがやってくるのか？）

李淋は珍しくも、怖くなってカイの服をきゅっと握り、目を瞑った。

その朝、李淋はカイに乱暴に起こされた。

「おい起きろー、出かけるぞ」

いきなりそんなことを言われても、まだほとんど寝ぼけているので困る。

「うるせーなあ、どーせ今日も宛がないんだろ・・・」

李淋は寝返りをうつた。

「いいから、さっさと起きて着替える！」

「うー」

外は寒かった。

「あー、さむう」

カイはぼやいた。

「んで、どこ行く気だよ？」

李淋が問いかけると、カイは急に何かを思い出したかのように、

「あ、そうだった……。お前に言うの忘れてたけど、俺の村、こないだ公害が起こったんだよな」

と言った。

「……ああ、あのときなんか臭かったのはそのせいかな」

「そうそう。それで、もう害はないとかいう噂が出るから、俺、家に帰ろうと思う。……あ、お前心配すんなよ？同居だ同居」

「……え？……ドーキョ？」

「『同居』だってば。一緒に住むっていう意味」

「え、それって、お前と……？」

「なんか問題でも？」

「いや……」

李淋はやはり心配だった。

カイにとってそのことは迷惑ではないだろうか？そう考えた。

でも、それは向こうから誘っているわけで……

住んじやっていいのかな？

「よし。決まった決まった俺ん家GO～～！！」

カイは右手を上げて叫んだ。

かと思いきや、急に李淋の方を振り返って言った。

「あ、俺の家、お前みたいな豪邸じゃねえぞ？狭いよ。結構。個室とかねーよ？」

「そんなのねだらねえよ・・・」

「うん、いい子いい子。れいりんたんはいい子だ」

（れ、れいりんたんって・・・）

二人は、カイが住んでいた村へと歩いていった。

「俺さー、実は姉貴がいたんだ」

カイはぽつりと言った。

「へえ、知らなかった」

「まあ、死んじやったけどな」

李淋はそんな話をされては何も言えなくなった。

なぜ死んだのか気になったが、あまり聞かないほうがよさそうなので、黙っておいた。

「で、そのぶんの生活道具やら色々あるんだよ」

「うん、・・・」

「お前がしょっちゅう気にするベッドの台数だが、2台ある。心配すんなよ」

「し、してねーよ!」

「まあ俺は淋しいけどな。たまには二人で寝ようぜ、いや、絶対寝てやる」

李淋は顔を赤くした。

（あー、もうやだやだ、一つのベッドに二人で寝て何が楽しいんだよ! つーか俺、この赤面する癖、なんとかならねえかなあ!）

「あ! そういうば、昨日の夜、お前、俺のこと好きって言ったよな!？」

「は、はああ!?!?」

「いや、絶対言った!?!? ・・・てことはあ、・・・両思いだあああああ!?!」

「う、嘘だ、俺は言ってな・・・」

そのとき、李淋の脳裏に昨晚のことが浮かび上がってきた。

確かに、李淋は犯され、快楽のあまりカイを好きだと言った。ついに言ってしまった。

「言った・・・・・・・・」

「な？言っただろ！」

カイは急に李淋の肩を抱いて歩き出した。

「やだ、この体勢無理」

李淋は頭をぶんぶん振った。

「なに恥ずかしがってんだか、もうすぐ着くぞ」

カイの腕は温かった。

それが一層李淋の精神を刺激させていた。

「あー、なんか懐かしいぜ!!」

カイの家に二人はいた。

「へー、ここが・・・」

「俺の家!!何週間ぶりだっけなあ!!」

まだカイがこの家をでてからあまり時が経っていないらしく、部屋は汚れていなかった。

玄関の扉をあけると、まず狭い靴脱ぎ場がある。

その奥はそう広くないリビングだった。それと端にあるのがキッチン。カップ麺の山積みがある。

近くに寝室がある。カイの言っていたとおり、ベッドは二つだったので、李淋は安心した。

「俺の服使っていいからな、共同できるものは使っていいぞ?あ、いやまあ下着までとは言わないけど」

「お前じゃねーから使わねえよ」

「なんだよそれ?俺が変態みたいじゃん」

十分変態じゃないか。李淋はそう思った。

カイは小さなファンヒーターのスイッチを入れた。

灯油はまだ入っているらしい。

「あーさむ・・・おい、李淋、こっちこいよ」

李淋はカイのほうへ来た。

「なんだ、これまだついてないじゃん」

「あとちよつとな。座れよ」

李淋が座ったところに、カイは身をくつつけるようにして座った。

李淋は何か言おうとしたが、だんだん慣れてきたので何も言わなかった。

ファンヒーターが火をつけた。

「あー、あつたけー」

カイは日の手前で両手をこすった。

部屋が小さいため、すぐに部屋中が暖かくなった。

（なんか、俺、疲れてんのかな・・・眠い）

李淋は火がついた頃から、少し眠くなっていた。

寝てもいいかな——いいよな、こいつなら許してくれる、はず

李淋はそう思っ、て、体育座りをしたまま眠ってしまった。

カイの手が、髪や肩に伸びるのが分かった。とても心地よかった。

男の手なのに、自分の頭を撫でる手が、とても温かくて気持ちがいい。

「寝ちまったか・・・？」

「・・・」

李淋は眠ったので、返事をしなかった。

なんだかカイは興奮してしまったが、なんとか抑えた。

最近よくやるので、李淋も疲れてしまうのではないかと考えたのだ。

「・・・ん、・・・う・・・、カイ・・・カイってば・・・」

李淋は寝言を言った。

「ん？なんだ・・・？」

「・・・」

そこで止まった。

そのとき、李淋の体がぐらつき、カイのいる反対の方向にそのまま

倒れた。

「あ」

カイは残念でなかった。

もし自分のほうに倒れていたならば、今頃自分の肩に李淋の頭があるのだ。

カイは無理に李淋の upper body を起こし、自分の肩に寄りかからせるような体勢に仕向けた。

「・・・んう・・・」

そのとき、カイは本当に理性を抑えられなくなった。

俺、このままじゃ、ヤバいんじゃないか・・・？

李淋を、犯したい・・・ずっと、俺の手で汚して、アイツが感じて、イクまで・・・

全部俺のモノにしたい・・・

犯したい、犯したくてたまらない・・・もう

犯してやる

カイは眠っている李淋の体を抱え、ベッドへと連れて行った。

李淋が目を覚ましたときは、もう遅かった。

何か様子が変わかなと思い、目を開いてみると、カイがやはりあの体勢で自分に馬乗りになっていた。

「え．．．？」

最初、カイが何をやろうとしているのかわからなかった。

「李淋．．．悪い」

カイは明らかにいつもと様子が違った。

いつも二人でやるとき、カイは黒い笑みを自身に向けてくる。

しかし、今日に限ってなぜか放心したような顔で、じっと自分を見つめている。

「な、なに．．．お前．．．」

李淋はやはり嫌な予感がしながらも、カイに尋ねた。

「お、俺、さつきから、変なんだよ」

「なにが．．．」

「なんか、い、異様にお前見て興奮して．．．そ、そのつまり、は、

はは発情的な・・・」

李淋は、ここではじめて今から何が起ころうとしているのかを察した。

それが分かった瞬間、李淋は怒鳴った。

「おいテメエ！！この間したばかりだろ！？俺いい加減やめてほしいんだけど！」

「うるさい！！」

すると、カイは珍しく李淋に怒鳴った。

「お前のこと犯さねえと俺が、・・・俺がもたねえ！！」

「やめろって、頼むから今日はやめてくれよ！！」

「い、今やったらしばらくやらないから・・・今日だけだ。約束する」

「・・・」

李淋は黙り込んでしまった。

カイはそれを隙に、自分の顔を李淋の顔にぶつけるようにして唇を重ねた。

「ふっ！！んあっ！！」

李淋は抵抗したが、李淋は下、カイは上になっているため、全く変わりはなかった。

やはりカイはいつもと様子が違い、舌をいつもよりも強く押し込んでくる。

ビチャビチャといやらしい音を立て、互いの唾液が混ざり合う。

「んぐうつ・・・んつ・・・く、ぐつ！あ、カハツ・・・」

カイの舌が李淋の舌に絡まる。

そのうえ、カイは滅茶苦茶に舌を動かすため、どんどん苦しくなっていく。

「ゲホツ！あ、あつ・・・ゲホゲホツ！！」

李淋は何とかカイの唇を引き剥がした。喉の奥から、どちらのものとも分からね唾液が何度もこみ上げてくる。

「ごめん、苦しかったか・・・？」

「苦しかった」

「お前、顔赤い・・・」

「・・・こんなことやってたら恥ずかしくなるし」

「冷たいなア・・・」

李淋は無理やり犯そうとするカイに少しキレていた。

「でも、やっぱ俺、抑えられそうにないから」

カイはそう言っ、李淋が着ている上着を強引に脱がした。

「え、ちょっ・・・無理」

「もう寒くないだろ？さっきストーブつけたんだから」

「そっいつ問題じゃなくて！」

カイは李淋の言うこともそこそこに、李淋の首筋に舌を這わせた。

「・・・、っ・・・・・・・・」

「もっと、強くしたほうがいいだろ？」

カイは返事を聞かないまま、李淋の首筋を吸う。

「・・・うつ、・・・やだ、跡が付くだろ」

「そのうち消えるさ」

「何勝手に・・・バカ」

カイは李淋の首から唇を離した。

「なあ、そろそろいいか？」

「な、何がっ・・・」

「下の方」

「やだ、やめろよっ」

「今日は、その、――」

「聞こえねえ・・・」

「・・・一緒に、イキたいんだよ、お前と」

カイは静かに言った。

「我慢すんじゃないやねえよ？ここならデカイ声出したって大丈夫なんだからさ」

「ふざけんなっ！っーかそろそろやめてくれよっ」

「・・・ったく、しょうがねえヤツ・・・」

そう言ってカイは李淋の下の方を弄り始めた。

「うあ、あ、やだって・・・、嫌だっ・・・！」

李淋は一瞬にして顔を赤くし、肩を震わせる。

「お前のその顔、もっとヤラシくなんねえかなあ？」

カイはニヤつきながら言い、その瞬間、膝で李淋の熱くなった部分を踏み躪った。

「ひぎいっっ！ー！ぐうあゝあゝっ・・・あうっ、いっ！いだいいっ！ー！」

李淋は雄叫びを上げた。

「へっ、一気にエロい顔になったな」

「いやあゝあっ！ー！いゝだああっ・・・！ー！やっ、や、やめろよオオっ！ー！」

「やべえその顔マジ最高」

カイは李淋を見下すようにして笑う。

「ほんとにいつ、いたいんだよっ・・・!!ぐあ、あ、っあ、っあ  
あああ!!」

「じゃあ一回イってからどうしてほしいか聞いてやる」

「ばっ、ばかあっ!!カイのばかあああっっ!!死ぬ!!いやああ  
っ・・・」

「死んだら駄目だぞ・・・ははは」

カイは嘲笑しながら思った。

（ははは、こんなに乱しくってる李淋は初めて見たぜ・・・。）

「くっ!!あああっ、ひいつ!!・・・っ、ひあああっ!!」

そのとき李淋が一気に射精した。

「うわ、勝手にイキやがったな」

シーツの上に生暖かいものが飛び散る。

「はあっ・・・、くそ・・・カイのバカヤローがっ・・・はあ・・・  
はあ・・・」

李淋は生理的に出た涙を手で拭い、力なく言った。

「前は、好きとか言ってくれたよな？今回は言ってくんねえの？」

「・・・誰が言うか。ボケ」

「あー、でも暴言ばかりのお前も萌えるなあ・・・」

「なっ、なにが『萌える』だよっ！！俺はそんなやつの対象じゃねえ！」

「いや、お前は『萌え』だよ？やべえ、お前マジかわいい・・・」

カイは李淋を抱き起こしながら言う。

（くっそー・・・、何が『萌え』だ、『かわいい』だっ！！超ム力ツクー！！）

李淋はカイの態度を恨めしく思う。

「後ろ、入れてもいい？」

「・・・え？後ろって？」

李淋にはカイの言うことがよくわからない。

「ここに、俺の、突っ込んでいい？」

李淋はカイの身振り手振りであろうくそのことを理解した。が。

「バカ！！そんなん入るわけねえだらあああ！？断る！」

「いや、それが入るんだな」

「って言ったってよ！お前のどうせデカいんだろ？見たことねえけど・・・」

ちよつとした沈黙が続いた。

「・・・まあ、お前が断つてもどっちにしる挿れるけどな。」

その言葉を聴いた瞬間、李淋は怖気が走った。

「や、やだ・・・俺、絶対やだっ！」

「どうせお前もまだイきたいだろ？一緒にイこうぜ？」

カイはありがちな言葉で攻める。

「なあ李淋？イきたいんだろ？ねえ・・・？どうした」

李淋は顔を俯かせたまま、肩を震わせていた。

「やだあつ・・・俺、嫌だ・・・こんな、こと、俺はっ・・・無理だよ・・・」

「・・・」

カイは何も言わずに李淋の言うことを聞いていた。

しかし、犯そうとする気持ちは変わらないらしく、自分は自分のほうで準備をし始めた。

そして李淋を自分の体の上に乗せる。

李淋の声に嗚咽が混じり始めた。

「やめろっ・・・嫌なんだよ・・・！俺、怖いっ・・・怖いいい・・・！！」

さっきまでカイの目の前で意地っ張りな態度を見せていた人間が、怖いと口に出すまで態度を変えてしまっている。

まるでさっきまでの李淋と今の李淋が別人に見えて、カイは少し変な気分になった。

「大丈夫だって・・・怖いんなら俺に抱きついとけよ・・・。優しくしてやるから」

抱きつけない体勢ではあるが、とりあえず李淋にそう言っておいた。

「・・・絶対、優しくする・・・？」

李淋は鼻をすすりながら言った。

「ああ。約束する」

「・・・痛かったら、承知しねーからな・・・っ、絶対、許さねえからなっ・・・！」

「もし痛かったら、何して欲しい・・・？」

「・・・今度、餃子おごれよ」

「ブツ！！・・・ツクツクツク・・・」

カイは吹き出した。

「・・・今回だけだからなっ？こんな甘っちょりーのは・・・！」

「いくらでもおごってやらあ、何なら手作りしてやる」

「・・・もういい」

「じゃあ、入れるぜ」

カイは、痛くならないように、さっき出た李淋の体液をローション代わりに塗りにたくった。

そして、少しずつカイは自分のものを入れていく。

「あ、ん・・・あつ、カイっ、やっぱり俺、無理・・・！」

「もうおせえよバカ・・・、わ、動くなつて、まだ半分しか入ってねえんだから」

「実況すんなよ・・・恥ずかしい・・・」

李淋は顔を真っ赤にして目を逸らす。

「わかったわかった・・・じゃあもう実況しないでいいように一気に入れる」

「え、ちよつ、待ってくれよっ!?!一気になんて・・・っ、うあ、あゝあゝああアアっっ!?!?!」

カイは本当に奥の奥まで一気に突っ込んだ。

(すげえ・・・けっこう絞まるじゃん!!コイツのナカ、やべえ!)

若干にやけながらこんなことを考えていた。

「ほら、気持ちイイだろっ?お前初めてだろうからちよつと痛いだろうけど・・・っ!」

「んぐっ、アあっ・・・、ハアっ・・・ハアっ・・・うああっ!!い、いやああっ!!くっ、苦しっ・・・ひぎっ!いだああっ!!」

自分の弱い部分を強引に広げられ、激しい痛みが襲ってくる。

「あんまり動くとお前がきつくなるぜ・・・?こっちで動かすからお前は力抜いとけ」

「で、でもっ!?!・・・なんかあっ、・・・勝手に・・・こっ、なるんだよオオっっ!?!」

グチグチと音を立てながら、二人の結合部分から一筋の血が流れる。

「カイ、痛いっ!もう、無理い・・・っ!?!・・・なっ、何これっ・・・!!!やだ、いやっ、血っ、血出てるううっ!?!ひ、あああゝ」

ああっ!!」

「・・・っ!!痛い?・・・痛いか?」

「つい、痛いっ、くっそ・・・約束、したじゃねえかああっ・・・優しく、するって・・・いやああ、あ、なんかっ・・・中でっ・・・なんか切れたああっ・・・」

李淋が何かを言う度に、口から生唾が流れる。

「初めてならこんなもんだって・・・そのうち気持ちよくなるから」

カイは、口ではそう言いながらも、こんなに出血するとは思っていなかった。

痛々しい程の量の血が溢れ、カイが李淋を突き上げる度に隙間から血が何度も噴き出した。

「嘘だあっ・・・あっ、ああああっ!!あ、やあっ、やだあっ!!やっぱり俺っ、駄目え!!怖いよおお・・・っ!!」

今まで襲っていた痛みに、急に快楽が加わり始め、その強烈な快感と激痛に、李淋は腰を震わせながら泣きじゃくった。

「ほら、段々気持ちよくなってきただろ?そのままイけば楽だぜ」

「や、いやあっ!!まだっ、イキたく・・・ないイ!」

「いいからイけ!」

「もうっ、無理い・・・！ひっ、うっ・・・んうっ！うあ、あああっっ！！！」

カイがもう一度李淋を突き上げた瞬間、李淋はイッた。

精液が飛び散り、シーツを汚した。

「・・・ごめん、痛かった？」

「はあっ、い、痛い・・・っ、は、早く・・・抜けよっ・・・」

「俺がまだイってねえ」

カイは止めていた運動を再び開始した。

「やだっ！！いやあ、そんなに動かしたらっ・・・あうっっ！！じっ、死ぬうっ！」

「もう少しだから、頑張れ」

「抜けえ！抜けよオオ！！俺・・・頭、おがじくなるうっっ！！もう、やだあゝああ！許してよオっっ！！！」

あまりの衝撃に、視界は回り、手足は激しく痙攣した。

「あと少しだからっ・・・」

「カイいっ！ごめんっ・・・なさい・・・許してっ！！お願い、許してくださいゝいい！！！」

頭がおかしくなったのか、李淋はカイに謝りはじめた。

そのとき、カイはふいに動きを止め、後ろから静かに李淋を抱いた。

「大丈夫、怖くないから・・・俺と一緒にいるから・・・心配すんな・・・」

その声はいつもとは違う、とても暖かな優しさを持っていた。

「うぐっ・・・でも、き、気持ち悪い・・・もう、吐きそう・・・」

「吐くなら今のうちだ。すぐに気持ちよくなるから・・・ほら、ゆっくりでいいから、力抜いて・・・」

李淋は涙を流し続け、酸素を求めてリズムの整わない、せわしい呼吸を続ける。

そして幼い子供のような口調で声を漏らした。

「カイ・・・絶対、一緒に、いてよ・・・」

「大丈夫、言わなくなっただけでわかってる」

カイは後ろから、李淋の赤い髪の毛を撫でる。

そしてまた腰を動かし始めた。

「ふっ、ううつ！お、おれえ、っ・・・な、なんかっ！すごいのくるうつつ！」

「イクのか・・・？イキそうなのか？」

李淋は声を荒げながら何か言っている。

ところが快感のあまり、言葉にならない。

「李淋っ、お前・・・なんて言ってるのか・・・全然わかんねっ・・・」

カイはそう呟き、李淋の反応を見た。しかし、そんなことに反応することすら李淋にはできないらしい。

「やべっ、俺も、そろそろ・・・イキそうかも」

カイは息を切らしている。

「うあ、でっ、出るならっ・・・さっさと出せああああっ！！！！」

「うっ、あ、李淋っ、じゃあ出すから・・・！！う　ああっ！！！！」

「カイっ・・・死ぬうっ・・・ぐぎいっ！！？ぎあああああっ！！！！」

カイは李淋の体内に射精し、それとほぼ同時に、李淋が二回目の射精をした。

「李淋っ・・・抜くから、ちょっとだけ我慢しろよ」

カイは急に独り言のように呟き、李淋の体内から自分の物を抜き出した。

沢山の血が混じった精液が糸を引いていた。

「ひっ、あああっ・・・！」

今まで自分を犯し続けていた物が抜けた瞬間、李淋は力の無い声を上げ、ぐったりとベッドの上に横たわった。

「・・・李淋・・・？おいっ・・・」

カイは李淋の名を呼んだが、返事はなかった。

李淋は既に気絶していた。

「んあ？李淋、お前・・・気絶してんじゃねえかよ」

カイはシーツの上をぐちゃぐちゃに汚している血と精液を見て、心が痛んだ。

（ちょっと、李淋にはキツすぎたかな・・・血がやたらと多いし）

カイは李淋の体を丁寧に洗ってやり、着替えさせてから自分のベッドに寝かせた。

本来李淋が寝るはずだったベッドは精液まみれで、そこに彼を寝かせるのはあまりにも哀れに思えた。

カイはシーツを取り除き、深夜にもかかわらず、洗面所で汚れが落ちるまでシーツを洗い続けていた。

翌朝、二人とも目覚めは悪かった。

カイはシーツを洗うのに時間がかかった為、寝るのが遅くなり、いつもより遅くまで寝ていた。

李淋は朝から全身筋肉痛で起きられなかった。

（つたく、まだカイは寝てんのかぁ・・・）

李淋は昨晚のことを思い出し、また一人で赤面していた。

（マジで、情けないっていうのか、昨日は声出しすぎたな・・・いや、でもあれは勝手に出ただけだし、それにほんとに痛かったから・・・いいいな？）

カイは昨晚二人で性交をした、シーツのないベッドで寝ていた。

（ああもう、体が痛<sup>いて</sup>えよ・・・てゆうか、性交って、あんなに痛いものなのか？）

李淋は痛む体で何度も寝返りを打った。

当に朝は過ぎていた。

いつのまにか李淋は眠っていたらしく、不意に目を開けると、そこにはカイがいた。

（・・・あ、カイ・・・って、何・・・何これっ!!??）

カイは李淋にキスをしていた。そして李淋が目を覚ましたことに気づいたらしく、唇を離した。

李淋は筋肉痛のこと忘れてベッドから飛び起きた。

「うああっ!?!あ、カイっ、い、今お前っ・・・」

「あ、起きた」

「起きたじゃねーよ!バカ!」

「李淋、顔真っ赤」

「うるさいっ」

カイはベッドの隣にあった椅子に腰を下ろした。

「しばらく、お前とできなくなると思ってたさあ。なんか切ないよなあ」

本当に切なそうにカイは言った。

「俺は、別に切くないし」

一瞬カイと李淋の目が合った。先に視線を逸らしたのは李淋の方だった。

「淋しいくせにっ」

「全然そんなことないわアホ！」

「でも今回俺、舌入れてないぜ」

「・・・ならいい」

カイは立ち上がった。

「さて、朝飯でも作るか」

「・・・、お前、料理できんの？」

「ちょっとな」

「・・・ふーん。」

「リクエストある？」

「ないっ！！」

「そんな照れなくてもいいだろう？このっ、可愛い奴めがっ！」

カイは李淋の顔をつつく。

「バカヤロー、顔を触るな顔を！」

李淋はカイの手を振り払った。

「すげえ男なのにすべすべしてる、しかもぶにぶにしてる！」

「キモイ！！ヘンタイ！いいから朝飯作れよ」

「へいへい」

カイはもうちよつと李淋の顔を触っていたかったので、ちよつとふてくされた顔をして部屋を出て行った。

しばらく李淋はベッドに寝転がっていた。

ふと、横を見ると、昨晚二人で性交したベッドがあり、そこにはシートがなかった。

自分の寝ているベッドにはシートが敷いてあるのに、そっちにはないのだ。

（まさか、アイツ・・・）

外を見回してみると、物干し竿にかかったシートらしきものを発見した。

あまりきちんと見ていなかったため覚えていないが、昨日のものに間違いないだろう。

（また、メーワクかけてんじゃねーか、俺・・・）

李淋は他人に迷惑をかけることが特に嫌いだった。

今までに何人の人たちに迷惑をかけてきたのかと考えると、ぞっとしてしまう。

(あー、やだやだ、考えるんじゃないかっ  
た)

15 (後書き)

つづきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6093o/>

---

妖～AYAKASHI～

2011年11月16日16時04分発行